

かたりべ 13

豊島区立郷土資料館だより



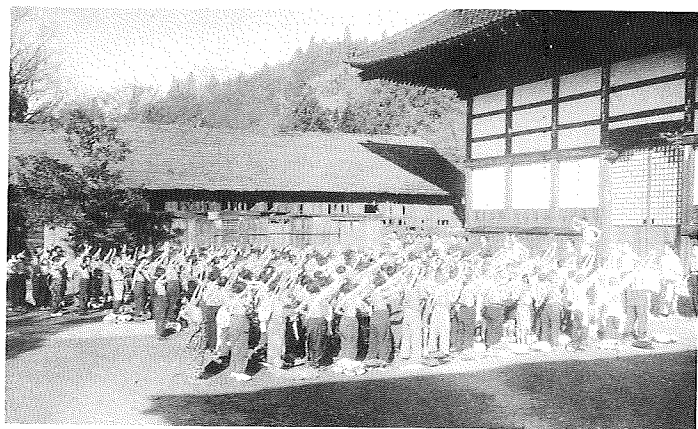
疎開学童とスキー

学童疎開に行った子どもたちが参加した行事の中で、今年の特別展の対象地域である長野県北部や山形県において、目立つのはスキーです。長野県平穩村では六年生が帰る直前の一九四五年二月二三日に渋温泉の少し上流の十二沢でスキー大会を開いています。スキーは一月から二月にかけて学校から各人に支給されました。

山形県の寒河江町でも長崎第二国民学校の疎開学童が近くの長岡山で、一九四五年二月一九日にスキー錬成大会を開いています。この写真は寒河江小学校から提供されたスキー大会のもので、スキーも戦時下では心身を鍛えるものとして位置付けられていました。

山形市・東根町・上山町などでもスキーをしています。上山町では東京第二師範付属国民学校の疎開学童たちはスキーを松坂屋で特注して持っていきました。同じ町に疎開した下町の学校の子どもたちはスキーを持っていませんでした。そこで旅館の人が、下駄の竹スキーを作ったそうです。

豊島区立郷土資料館では昨年引き続き、第二回目の学童疎開の特別展を七月二日から八月三日にかけて開きます。昨年は長野県中部と福島県への疎開を主に取り上げ、そこの学童たちがどんな生活をしていたかを示しました。そこでは飢えやひもじさに苦しみ、シラミやしもやけなどに悩まされたこと、家のことを思い出して泣いたこと、いじめなどがありました。それらをどうして学童疎開とは子どもたちにとってなんであったのかを考えてきました。



長野県平穂村（現・山ノ内町）の温泉寺で、乾布摩擦をする
高田第一国民学校（現・高田小学校）の疎開学童たち

その上で、今年の第二回の特別展では引き続き疎開の実態を明らかにすることとやらんで、戦時下の子供たちの意識と、それを形成した社会や教育のあり方をも考えていきたいと思っています。昨年調査の遅れから取り上げられなかった地域、長野県北部・山形県の実例を通じて今年はこちらの課題の追求をします。

疎開した学童を含めて、戦時下の子どもたちは自らが戦争に参加していかなければならないという意識を持っています。男の子の場合は特攻隊や少年航空兵を始めとする兵隊になることを目指したり、女の子の場合は看護婦になるなどの形での戦争参加を考えたりしています。これは疎開当時に書いた子どもたちの日記・寄せ書き・図画などに見られます。特に長崎第二国民学校六年生が山形市の蔵竜院に疎開し、卒業のために、東京に帰る直前に「寄せ書き」を書き、お寺に残しています。そこに「我らの道は特攻隊」「靖国の社に咲かむ若桜」「正行公に続かん」などの言葉が見えます。

このような国民学校上級生に見られる意識は、勿論疎開に来てから形成されたものではなく、それ以前からの教育によるものです。とりわけ一九四一年に小学校が、国民学校に切り替えられますが、そのころを契機に、国家への奉仕、特に戦争への参加、それに備えて体錬という形での身体を鍛えることの重視が強められます。

この教育の結果がさきに見たような子ども意識を生みだしたわけです。そして学童疎開には戦力にならないものを大都市から追い出すことという人員疎開一般に共通する目的とともに、次代の戦力保持という狙いが当時の為政者にあつて、それが貫かれていたといえるでしょう。

特別展は次の四つのコーナーで構成されます。

- 一、学童疎開がはじまった
- 二、「兵隊さんになったつもりでぐわんばらう」
- 三、百里も離れて
- 四、さらに遠くの村むらへ

「一」では、疎開をもたらしした戦争の実態、人員疎開とならぶ建物疎開のようす、当時の学校の資料を通じてうかがえる、戦時下の国民学校の教育内容などを見たいと思っています。「二」では、山形市に疎開した六年生の少女の日記を紹介する形で、疎開学童の意識や疎開の経過などについて、見ていきます。

経過では準備から出発・到着、疎開地での生活、強歩大会・芋煮会・宿泊訓練などの行事、そして、帰京などを取り上げます。意識では、戦争に全てを捧げる生活を目指していることなどをみてみたいと思います。

「三」では、疎開生活に使われ、いまま残されている物、記録そして写真を展示しつつ、疎開の生活やできごとにつつまれる話も紹介してい

きます。

「四」では再疎開を扱います。平穂村・上山町などの温泉では旅館が傷い軍人の施設になるため、疎開児童が追い出されます。山形市などの都市では空襲の危険が迫り、再疎開をしています。そしてより山奥の村の寺院などに移っていききました。どう移動したかを地図で押さえるとともにそこの生活ぶりを見ていきます。

今年取り上げた疎開地域の実例を通して窺える疎開の実態はやはり全体としての生活条件の悪さと、その中でもそれぞれに意外と違いがあることです。

どこでも一番苦労したのは食糧の確保です。ひどい所ではカエル・セミ・トンボなどまで食べています。お寺で壇家の協力を得て、野菜や時には牛乳などの食糧を確保し、寺の人と同じ食事を疎開児童に食べさせていたような所もあります。一方で子どもたちと先生との食事内容があまりに違うのに、お寺の人が驚いたという話もあります。再疎開で村に移ってからは全般的には食糧事情が悪くなり、疎開児童を支える村の人たちの努力はいつそう大変になっています。鮭缶やバターの配給のあった疎開児童の方が地元の人たちよりも食事が良かったという所もあるほどです。

衛生状態ではやはり温泉の方がお風呂などの条件はよかったです。村の寺では疎開児童を迎えるに当たって、風呂・トイレ・炊事場な

どを新設したところが多いのですが、大勢の所では日曜日に一日かかって風呂に入ったという所もあります。

このように食糧事情やお風呂などのことを見ても、児童疎開が、十分な配慮と準備なしに実施され、教師や寮母そして受け入れた旅館やお寺の人たちによる、物不足の厳しい条件の下での必死の努力によって支えられていたことがわかります。

授業は山形市などでは児童疎開が集中していたため、いくつかの学校に振り分けており、かなり遠くの学校へ通った場合もあります。須坂町でも隣り村の学校へ通った所があります。山形市の鈴川国民学校のように冬になり、雪靴がなくて、学校に通うのを止めた所もあります。平穂村では疎開児童が多過ぎるので、ほとんど学校に行かないで、学年ごとに旅館で坐学をしています。いずれにせよ困難な条件のもとで教育がなされていたことがわかります。しかしその中で行われた教育が軍国主義的であったことはわすれてはならないでしょう。

特別展では展示とともにビデオの形で、映画を上映します。昨年も取りあげた長崎第五国民学校の「疎開生活の記録映画」とともに、集団児童疎開をテーマにした劇映画「ボクちゃんの戦場」、戦時下の教育の記録映画「戦ふ少国民」なども上映します。

収蔵資料燻蒸（第一次）終わる

去る五月一八日から二〇日までの三日間、雑司が谷旧宣教師館・付属棟収蔵庫に収納されている農具・生活資料を中心とする資料館収蔵資料の燻蒸処理作業が行われました。

燻蒸処理は、区民の皆さんからの御寄贈等により収集した貴重な歴史・生活資料を虫食い、被害などから守るため必要な作業です。

当日は、三日間とも天候に恵まれ、効果的に燻蒸処理作業を行うことができ（燻蒸は、気温が高ければ高いほど効果があるとされています）無事作業を終了させることができました。また、同時に付属棟収蔵庫にも防虫・殺菌処理を行いました。

郷土資料館では、引き続き秋に本館収蔵庫収蔵資料の燻蒸処理作業（第二次）を行う予定です。それにとりまう資料館開館日の変更などに御注意下さい。区民の皆様の御理解と御協力をお願い致します。



前回に引き続き、『豊島・宮城文書』を作成する過程で、原文書を見て発見したことを披露したい。

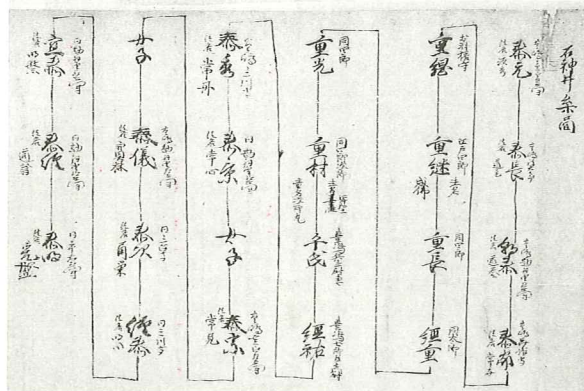
豊島氏についての本を読んだことのある人は、一四七七（文明九）年から翌年にかけて、豊島泰経が太田道灌に攻められ滅亡したという歴史的事実を知っているに違いない。だが、ほとんど常識とさえ思えるこの事実も、少しつつこんで考えると大変あやふやなことが判明してきた。

まず泰経の実否である。当時の記録類には、豊島勘解由左衛門尉が江古田・沼袋原などで道灌に敗北した——とはあるものの、それが泰経であると明記した史料はない。勘解由左衛門尉を泰経と比定したのは、江戸時代の後半に作られた豊島氏系図の諸本なのである。

たとえば、今回の調査で再発見された泰盈本系図（中世の分は『豊島・宮城文書』に収録）には、泰経のところは、「勘解由左衛門 法名道翁 武州石神井及練馬城主」と書き、さらに八行にわたって太田道灌に滅される経緯を書きつらねてある。後世の研究は、全てこの系図に依拠して、豊島勘解由左衛門尉を泰経とみてきたわけである。

このような近世系図が、家伝や文書・縁起類を使って編纂されたのは常識であり、多くの誤まりを含む可能性が高いのは良く知られている。泰盈本系図で、泰経の子が康保になっているの

は、系図編纂者が『豊島・宮城文書』二四号を讀みまちがえた誤まりの好例と言える（康保は石巻姓で北条氏の家臣）。それでは、編纂者は何を根拠に、勘解由左衛門尉を泰経に断定したのだろう。それはおそらく、左の写真の文書だ。



『豊島・宮城文書』より 石神井系図（8号）

作成年月日不明の中世系図であるが、ひとつこの写真をじっくり見ていただきたい。最後が勘解由左衛門尉泰経と平右衛門尉泰明で終わっており、これが豊島氏が泰経で滅びた証拠と考えられたのだろう。だが、罫線の感じや経・長などの字体、書きくせをよく見てほしい。重経から経祐までの八人、つまり二行目と三行目が

前後の部分とくらべて濃い墨で丁寧に書かれているのがわかるだろうか。この八人は実は江戸氏の一族であり、始めはこの二行しかなかった江戸氏系図に、後になって前に一行・後に三行を書きたして、「石神井系図」に改ざんしたのである。また史料上豊島勘解由左衛門尉が活躍しているのは、一四六八〜七七年のたかだか十年足らずの期間であるのに、系図の方では四代もの勘解由左衛門尉が作っており、江戸時代の系図はこの四人を実にでたために古文書にあてはめているのである。

改ざんされた、しかも内容上も多くの疑問のある石神井系図を無批判に使用してしまった江戸時代の系図。それを信用して怪しまなかった従来の研究。どうやら、豊島氏が泰経・泰明兄弟で滅んだという通説には、確たる根拠はないようだ。『豊島・宮城文書』では、関連年表を次のように作っておいた。

一四七八年……1月 豊島勘解由左衛門尉再び平塚城に敗れ、小机に没落へここに国人領主の豊島氏は滅亡。

かたりべ

No.13

1988年6月30日
発行

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話03-980-2351